
夢の故郷

ユタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の故郷

【Nコード】

N6917Q

【作者名】

ユタ

【あらすじ】

犯した大きな罪 決して赦されぬ数多の罪
それらを背負い、男はゆっくりと立ち上がる
かつて巡った血塗られた道を、今再び辿る

闇の国 1話

まだ日も高いが、辺りは輝く太陽の光を受け付けないかのようにどこか暗く、そして静寂が広がっていた。周囲に植物は少なく、どこまでも伸びる道を遮るものはない。

晴れ渡っているにもかかわらずどこか暗澹とした空の下、2人の男が足早にその道を辿っていた。

「相変わらずこの国は曇ってんのか晴れてんのか分かんないな」
呆れ気味にそうぼやいたのは小柄な男の方だった。フードを目深に被り、大きな溜め息を吐く。

彼らが今いるのは南北に伸びた西大陸、その北側に位置する闇の国である。闇の国は国土こそ広くないものの、豊富な鉱石によって栄えてきた。その反面、山を削り石を運び出すことで清らかだった川は汚染され、とても飲めるものではなくなっていた。

「なあ、エレツ。港街まであとどれくらいだ？」

小柄な男が再び口を開くと、一歩先を歩いていた男は足を止めた。その大柄な男の漆黒に濡れた目は、しっかりとその目標を見据えるかのように前方に向けられている。

「もうすぐ着く」

「……それ、さっきも言ってた」

そうぼやくのを聞きながら、エレツと呼ばれた大柄な男は小さく苦笑を漏らす。

「すまん。日が落ちる前には着く予定だ」

エレツは言いながら被っていたフードを脱ぎ、短く刈った黒の短髪を風に晒す。風は穏やかだったが、どこか生温く火照った体にはあまり気持ちの良いものではなかった。仕方なくエレツは再び歩を進める。

「手前の村で馬調達出来なかったのが痛いなあ」
エレツよりいくばか疲労をその顔に滲ませながら、小柄な男が呟

く。

最初こそ馬で移動していたのだが、かなり年だったせいもありまったく持久力がなかったのだ。仕方なくその馬は手前の村で乗り捨てることにしたのだが、村は小さく売買される馬を維持するだけの余裕もなかった。何頭かの馬を目にしたものの、いずれも持ち主が手放すのを拒んだため入手できず村を後にしたのだった。

年老いた馬を使うことも考えなくてもなかったが、大して走れもしない馬を連れ歩くより自分たちの足で歩いた方が金銭面でも楽であるため結局は置いてきたのだった。

「ダズ」

歩く足を止めることなくエレッツが言うと、小柄な男――ダズは首を傾げる。

「まだ先になるんだが、光の国にも立ち寄りたいんだ」

「……うん」

些か気の進まないような曖昧な返事でダズが応じる。

「どうにかして入国できないだろうか……」

「闇の国を抜けたら水の国で、それから光の国だっけ？」

ダズの言葉にエレッツが無言のまま頷いた。

彼らのいる闇の国とは陸続きで、西大陸の南側が水の国になっている。そこまではさして問題はない。だが海を超えた先にある光の国は非常に閉鎖的な国で、他国の人間の入国を許していない。しかし完全に入国を遮断しているわけではないらしく、一定の条件、もしくは国の者のコネがあれば入国は可能らしかった。

「……アテ、ないことも……ない」

考えを巡らすように途切れ途切れに言葉を紡ぐ。

「頼めるか？」

「うん……分かった」

ダズにしては珍しく歯切れの悪い返答であったが、エレッツあえてそれを問いただそうとはしなかった。時折あるのだ。こうして光の国に話が及んだり、ダズの過去に触れる話になったりした場合もや

はり言葉を濁しがちになる。

「助かる。あの国でも、俺は多くの人を殺しているから……」
呟くように言ったエレツの顔は僅かではあるものの渋面に歪んでいた。



「やっと着いた……」

遠目に見え始めた港街の明かりは、日がだいぶ傾いた頃になってようやく目の前に現れた。街へ入るための門はまだ開いており、門番も立っている。ダズと連れ立って街に踏み込む瞬間にちらりと視線を向けられたが、咎められはしなかった。それだけのことでエレツは内心安堵する。

「すまなかったな」

街の中心地へ向かいながら、後ろを付いてくるダズに声をかけた。
「いいって。俺の体力ないのが悪いんだから」

苦笑しながらそう言葉を返してくるが、余程疲れているのか時折足元が覚束ない。エレツも多少の疲れは蓄積されていたが、ダズほどではない。元々あまり体を動かす方ではないはずのダズを慣れない地で頑張らせ過ぎたのだろう。

「もう少しだ。歩けるか？」

無理なら肩を貸そうと手を伸ばしてみるが、ダズはきっぱりと頭を振ってそれを断ってきた。

「気持ちだけでもらっとく」

そう言いながらも疲労は隠しきれていなかったが、ダズはしっかりと自分の足で歩いていた。

2人が人ごみをかき分けてまず向かった先は街で一番大きな宿屋

だった。

おそらく限界に近いであろうダズを休ませる場所も確保しておきたかった。幸い部屋にはまだ幾らかの余裕があるので、人数を告げるとすぐに2人部屋を用意された。

「あー、疲れた」

部屋に入るなりダズは真っ先に外套とブーツを脱いでベッドの上に倒れこむ。やや長めの金色に近い茶髪がベッドに広がるが、本人はそれを気にした様子もない。

エレッツはそんなダズを見ながら外套だけを脱ぎ去ると、やや大きな荷物を下ろして中身を確認する。荷袋と、腰に下げた小さな袋の中からそれぞれ束にした紙を取り出して床に広げると、興味津々といった様子でベッドに寝転がったままのダズがエレッツの手元を眺めていた。

「描術か」
びょうじゆつ

「実践では詠唱術よりこちらの方が使いやすいんだ」

エレッツは言いながら紙の束を種類別に分けていく。

「なんだよ、地と水と火だけか」

山は3つにしかならず、それ以上増えることはなかった。ダズは残念そうにばやきながらベッドの上から手を伸ばし、一番多く積まれた紙の山から1枚を手にとった。大体手のひらサイズで、紙にはどれも特殊な文様が描かれている。

「低級の闇属性の術なら何もなくてもすぐ出せるし、俺にはこれ以上の上のものは必要ないからな」

「……そっか」

何かを言いかけたようにも見えるが、ダズはそれ以上は何も言わず手にした紙を元あった場所へと戻していた。

「夕飯でも調達してくる。食べたい物はあるか？」

エレッツは紙の束を袋の中にしまいながらベッドの上のダズを見やると、ダズは夜の海よりも深い青い色の目を細めて苦笑する。

「干肉以外ならなんでも」

「街に着いてまで食べるつもりはないさ」

旅の道中は基本的に日持ちがするものを持ち歩くのが一般的であるが、エレッツはそれをどう解釈したのか干肉しか持ち歩いていない。当然、街から街へ移動する間の道中はそれを食べながらの移動となる。1日2日なら問題はないが、さすがに何日も続くとなると飽きてくるのも仕方がなかった。

「行ってくる。少し休んでくれ」

腰に下げた剣はそのままに、エレッツは宿の一室から夕闇の迫る街へと出て行った。

闇の国 2話

エレッツが外に出てからしばらくすると日は落ち、夜の闇が街を支配する。

日没を迎えると街から外へ続く門は固く閉ざされ、外から戻って来た者と夜の街を楽しむために家から出てきた者で街中の道はごった返す。エレッツもその人の波に揉まれながら2人分の夕食を屋台で買い込み、宿に戻ってきた。

宿の1階は受け付けと、宿泊客のみが楽しめる酒を提供してくれるスペースがある。利用客を限定したそのスペースには人が点在し、忙しくないが作業が途切れない程度の混雑を見せている。静かに酒を飲むには良い環境だった。エレッツも僅かに興味をそえられるが両手に抱えた夕食の存在を思い出し、小さく息を吐いた。諦めて階段を上り、与えられた3階の一室へと足を向ける。

部屋にはすぐたどり着いたが、エレッツはすぐにドアには触れなかった。中から声が聞こえていた。無論、部屋に残っているダズの声。

「……そう、お願いしたいんです。私はまだ……」

誰かと話しているようだったが、相手の声は全く聞こえない。

「まだ、帰れません。……兄様には、きちんと謝罪するつもりです」

エレッツと話す時のダズの言葉遣いからはあまり想像つかない口調。誰と話しているのか、検討もつかなかった。

少し迷ったが、このままここで立ち尽くしていたところをかえって他の宿泊客に不審に思われるだけである。まだ会話は終わりそうになかったが、仕方なくエレッツはドアを開けて部屋に立ち入った。

「え、ちよっ……！ レイ、あ……後でまた連絡します！」

ダズはエレッツの姿を見てうろたえつつも、姿も見えず声も聞こえない相手との会話を終了させ、持っていた小さな透明の珠を腰に下げた革袋に突っ込んでしまった。

「……聞いた、よな？」

「知れば知るほど生まれが分からなくなるな、ダズ」

苦笑しながらエレツが言うと、ダズは深い溜め息をついて肩を落とす。

「言いにくいことなら聞くつもりはない」

そう声をかけながら野菜のスープとパンをダズに差し出すと、ダズは申し訳なさそうに小さくなりながらそれを受け取った。エレツは小さなテーブルに残りの食料を置き、スープの入った器を手に立ったままそれに口をつける。

「んつと……光の国に入る方法、多分なんとかなるから」

ダズはパンをちぎりスープに浸しながら、何から話していいのか分からないといった様子でそう呟く。

ダズは時折、エレツの目にはとても新鮮に映るような言動をすることがある。先程の妙に畏まったような言葉遣いもそうだが、パンを食べる時もそれは当てはまる。エレツは大きめのパンを渡されてもそれに直接かぶりつくことが多いが、ダズがそれを行ったことはエレツの知る限り、1回もない。必ず丁寧に小さくちぎってから口に運ぶ。スープも今でこそ直接皿に口をつけて飲むことが増えたが、最初はスプーンでちまちまと掬っていたのだ。

「今の言霊の相手か？」

「あ、ああ……うん。レイって言うんだ。光の国の者で、ある貴族の私兵をやってる人なんだけど……、用事があって風の国まで来てるらしい」

光の国に触れる話になると途端に歯切れが悪くなるのは今に始まったことではないので、いつも通りとエレツは割り切って先を促す。「水の国まで来てくれるみたいだから、俺も船で先に水の国に渡ろうと思うんだ」

水の国は森を隔てた西大陸の南側に位置する国。森を越えなければならぬが、闇の国とは陸続きで徒歩で行き来することも可能な国である。

森で区切られているため船で水の国に入るのが一般的であるが、エレツは森を越えるルートを選択していた。

「構わない。しかし、待たせることになるが……いいのか？」

「それは大丈夫」

ようやく普段どおりの笑みを見せるダズにつられるようにして、エレツも微笑する。しかし、続けられた言葉でその笑みは苦笑に変化する。

「でも、エレツ……本当にやるのか？ その、墓参り」

言い難そうにダズが口にしたのは、エレツの旅の目的そのものであった。

「ああ。何年かかってもやるつもりだ」

そう言うエレツの口調に迷いは一切無い。

「俺が殺してしまったんだ。あれだけの人を」

「行ったところで歓迎されないんだぞ」

「分かってる。俺の命を狙う者がいるのも事実だ。墓参りも自分のためではない」

ダズはスープを飲み干し、具だけが残った器を枕元に置いて身を乗り出す。

「ならどうして！」

ダズが言わんとしていることも、エレツは分かっていた。恨みを再燃させるような行動はやめて隠居でもしろというのだろう。実際、それが正しい道なのだろうことはエレツも薄々感じている。

「謝りたい……」

エレツの絞り出したような声に、ダズは思わず口を閉ざす。

「今でも覚えているんだ。10万9146人……知りたくもないのにあの男が教えてくれていたからな」

そこまで口にしてから「いや」とエレツは頭を振る。

「10万9147人……ゲレリイを抜けた後、世話になった場所で1人殺したんだ」

やや表情の消えた顔でエレツは呟く。

「重犯罪者専門の暗殺組織、言い方を変えれば義賊だな。ゲレリイの時とは違って、気のいい奴らばかりだった。仕事だから俺も1回だけやったんだが、駄目だった……」

「……何が？」

「意識が飛んだ。気が付いたのは仲間の腕1本、切り落とした後だった……」

エレッツはそこまで言うのと、それ以上は言いづらそうに深く息を吐き出した。ダズも何となくそれを察したようで、無言のまま中断していた食事を再開する。

「そいつは俺がやったと言いはしなかった。組織のリーダーも、俺がやったと感づいてはいたようだがそいつの意思を尊重してくれて……仲間の誰にも言わなかった」

エレッツはゆっくりとベッドに腰をおろし、深い溜め息を吐く。

「それ以上、そこで迷惑を掛けるわけにもいかず……結局入って2ヶ月で抜けさせてもらったんだ」

言葉を切ったエレッツに、ダズは咀嚼していたものをきれいに飲み下してから口を開いた。

「でも、それと墓参りは……」

「そうだな……関係はない。ただ、もう人に対して剣を振るうことはしないと……誓いを立てた上で、謝りたいんだ」

「誰かが殺したいと願う悪党だったとしてもか？」

「殺さない」

「自分の命が危険に晒されてもか？」

「逃げれば良いだけだ」

頑なに己の意見を曲げようとはしないエレッツに、ダズは大きく息を吐いた。

「頑固だなあ」

苦笑しながら言うダズに、エレッツもやはり苦笑を返しながら「お互い様だ」と小さくぼやいた。それなりに長い付き合いで互いに分かりあっているものはいるものの、こういう場では改めてお互い頑固である

と認め合うのだった。

「あ、エレッ」

ダズはパンにかじりつくエレッを見て首を傾げながら声をかける。
「水の国の南側の港に行く定期便があると思うんだけど、結構出るのか？」

「そうだな」

エレッはパンを飲み込みながらそれに応じる。

「南港行きは、2日か3日に1本だったと思う」

「どれぐらいで着くんのだ？」

「15日〜20日といったところだな。それでも馬よりはずっと早い」

ダズは渋そうな顔をしながら器の中に残った野菜を頬張る。

「比較的陸沿いを走る船だ。危険も少ない」

エレッがそう言うと、ダズはまだ口の中に残った野菜を食べながら分かったとでも言うように何度か頷いていた。

闇の国 3話

「水の国の南港行きかア」

翌朝、エレッツはダズを連れて街の港までやってきた。まだ早朝にもかかわらず闇の国唯一の港というだけあって人は多く、また巨大な客船もいくつか停泊している。乗組員らしき男たちも港内を慌ただしく行き交い、どこに向かうのか多くの客が乗り込む船もあった。そんな中で2人が目を止めたのは船の発着を管理しているらしい男。尋ねると愛想よく応じてはくれたが、言い難そうに帳簿へ視線を落とした。

「昨日の昼前に1便出たんだ。生憎次の船は到着はするんだが休船でな、すぐにメンテナンスに入るんだ」

船に不具合がないかを確認するために、定期的に欠航が発生するのはエレッツも知ってはいたが遭遇したことはなかった。どうやら運が悪いらしい。

「ついてないな」

滅多にあることではないのだ。それに当たることは稀で、エレッツもさすがに困った表情を見せる。

「次はいつ出るんだ？」

困っているのはエレッツだけではなく、ダズも一抹の不安を抱いたような顔でそう尋ねると男は帳簿を繰った。

「6日後の昼の鐘と同時に発つ予定だな」

「6日か……。なら待ってそれに乗ったほうが南港には早く着くだろうな」

エレッツの言葉にダズが首を傾げる。

「馬でも？」

「早馬を乗り潰しながら向かう気があるなら、馬の方が早いだろう」
エレッツが言うと、帳簿を手にした男も同意するように頷いた。さすがにそれは嫌だったようで、ダズが渋い顔で小さく頭を振る。

結局、6日後の船を待つということで落ち着くことになった。他にも何人か同じ船を目的に足止めを食らった客がいるようだったが、同様に船を待つことを選んだ者と、中央港と呼ばれる水の国の中心地に近い港へ向けての船で妥協する者とは分かれていた。

エレツとダズは大通りから少し脇道にそれた場所にある飲食店へと腰を落ち着け、店の主人に軽食を注文する。程なくして注文したものが運ばれてきたのを見て、エレツの隣でダズが眉間にしわを寄せた。

「水……って、言ったよな。俺」

2人分用意されたそれは丈夫そうな取っ手のついたグラスの中に、涼やかに泡のたつ液体が並々と注がれている。

「蒸留水が出るとでも思っていたのか？」

驚いたのはエレツの方だった。闇の国といえば水質の悪さが評判の国。清らかな水が豊富に存在する水の国と隣接しているにもかかわらず、水質は悪い。そこらの店で水を注文しても文字通り水が出てくることなどなく、高級店ですら扱う店は限られている。

「水って言ったら……蒸留水だろ、普通」

「この辺りでは無理だろうな。近海の海水も国が危険と指定しているから海岸沿いの街でも蒸留水は手に入らないんだ」

エレツの言葉にダズは力ない溜め息を吐き、仕方ないといったようにグラスを傾けて渴いた喉を潤した。

「それで、エレツはどうするんだ？」

ダズは肉と野菜を腸詰めにしたものにナイフを入れながら、隣でそれを遠慮無く丸ごとかぶりついているエレツに問いかける。美味しいのか美味しくないのか分からない変わらない表情でそれを食べていたエレツは、少し考えるようにフォークを置いた。

「長居するつもりはない。足りないものを補充できたら、すぐに発つつもりだ」

エレツはそう言ってグラスを傾けると、口内をすすぐかのように

一気にそれを飲み干してしまった。

「すまないが……」

グラスを持ち上げて店主を呼ぶと、カウンター越しに店主はそれを受け取って同じものでいいのかと尋ねてきた。エレッツがそれに頷くと、すぐに空だったグラスが満たされて戻ってくる。

「ダズはゆっくりするといい。船のある日までの部屋代ぐらいは出しておく」

「助かるよ。ちょっと手持ちやばかったんだ。次の患者のそこ着くまでは収入なんもなくてさ」

恥ずかしそうに頭をかくダズに、エレッツは苦笑する。

エレッツがそうであるように、ダズも医者ではあるが一箇所に留まって仕事することは殆ど無い。知り合いの医者たちから、彼らの手に負えない患者の情報を入手してはそこへ赴いて治療を行なっている。そういった患者の大半は貴族であるが、平民の患者を診ることも少なくはない。多額の治療費を受け取っても、平民の患者を診るときはほとんど赤字同然で治療に当たるため、ダズの懐は常に余裕が無い。平民の治療を辞めれば安定はするのだろうが、当然ダズはそれをよしとはしなかった。

2人が朝食を食べ終わる頃にはその店にも人がぼつぼつと入り、外に出ると商人たちが路上に品物を並べ始めているところだった。街には生活必需品を扱った店舗を構える商人もいるが、路上では一風変わった品を並べる行商人が多い。港街ならではの光景。

エレッツも路上の品を眺めながら歩いては、時折気になるものを手にとって行商人と言葉を交わす。

「兄ちゃん、いい物に目つけたな」

エレッツが手にとった紙を見るや、行商人は嬉しそうに声を弾ませる。

「長旅には必須！ 水の妖精術を封じ込めた紙だ」

行商人は紙を手にとって空の桶の中にそれを入れ、よく見てるん

だと言わんばかりにエレッツとダズの前に突きつける。

「びょうじゅつ描術びょうじゅつといって、妖精術が使えない者でもちよいとしてやれば――」

そう言いながら行商人が改めて紙に触れると、紙はまるではじめからその存在が偽りだったかのように跡形もなく消え去り、代わりに桶の中に並々と水が満たされていた。

「ほらごらん、新鮮な生水だ！ 水の国の描き手、カウビルアンデトラの作だよ」

自慢気に語る行商人に、エレッツの表情も微かに緩む。1枚1枚確認してみるが、類似品を常用するエレッツの目にもそれは丁寧な品であり、文句なしの一級品であることが分かった。

「あまり聞かない名だな」

「あれ、エレッツ知らないのか？ 最近出てきた結構優秀な描術師だよ。俺もこの人のは使ったことあるけど、良いの多いよ」

横から口を出すダズの言葉に応じるように行商人も頷く。

「名は知らないが、質はいいな。これでいくらだ？」

確認したばかりの束を差し出すと、行商人は手を開いてエレッツの前に突きつけた。

「金貨5枚」

思わず眉間にしわが寄るのを感じながらエレッツは息を吐く。

「高い」

「カウビの品だ。これ以上は難しいんだ」

困ったように行商人が言うのを聞きながら、エレッツは腰に下げた革袋に手を伸ばす。中には決して多くはない枚数の金貨といくつかの宝石が無造作に詰め込まれていた。

「分かった、これでどうだ」

エレッツは革袋の中から比較的小ぶりの赤い宝石を取り出し、行商人の目の前に差し出す。行商人はそれを手に取り、まじまじと眺めてやがてそれが本物である事を確信すると笑顔で頷いた。

「こんなに貰っていいのかい。金貨10枚は下らないぞ」

「あまり金貨を使いたくないんだ。それで応じてくれるなら安い」

そう言うと、行商人はエレッツの気が変わらないうちにと大急ぎで宝石をしまいこみ、描術の紙束をエレッツに押し付けた。

日はまだ高く、エレッツとダズは当てもなく路上の店を眺めながら、港から離れるように街中をゆっくりと巡り歩いた。

闇の国 4話

「一応連絡用に渡しておくよ」

宿に戻ると休む間もなく荷をまとめるエレツの目の前に、ダズが手の中に収まる程度の小さな透明の珠を差し出す。前日、ダズがレイを相手に喋っていたとき手にしていたのと同じものだった。

言霊と呼ばれる精霊術によって生成された特殊な珠。対となる珠を持つことで離れた場所にいる相手とも会話ができるという代物だ。「助かる」

エレツはその珠を受け取ると革袋に押し込み、まとめたばかりの荷袋を背負った。

「10日に1回は連絡がほしい。あと、いろいろあるだろうから俺からは連絡しない。都合のいい時にそっちから飛ばしてよ」

ダズの言葉にエレツは小さく頷く。

「それにしても……ダズ、こんな高価なものどこで手に入れてるんだ？」

エレツの疑問も尤ものである。今ダズから手渡されたばかりの珠は市場に出回るような品ではなく、入手経路も限られており、一対で数百枚の金貨が飛ぶと言われている珍品。それをダズは少なくともエレツの分とレイの分、二対は持っていることになる。

「それは秘密だ」

まるで子供のような笑みを浮かべながらダズは自慢気に答える。

こうなるとダズはそれ以上口を割ることはない。エレツは諦めて溜め息を吐くと、腰に下げた剣の柄にそっと手を乗せた。

「それじゃ、また水の国の南港で」

「うん。気を付けろよ」

口調は明るい、眼の奥には心底エレツの身を案ずる光が宿っていた。エレツは苦笑し、部屋のドアをくぐった。

ダズが心配するのも無理はない。これからエレツがやろうとして

いることは敵を作ることとはあっても、味方を作ることとはまずない。ダズを連れている間に面倒事が起こらなかっただけマシな方である。宿屋の主に事情を説明し、ダズだけが残っていることを告げて宿屋を後にすると、エレツは真っ先に街外れに足を向けた。

街外れにはまるで街から隔離されたかのように寂れた厩舎があり、何頭かの馬が狭い柵の中に閉じ込められていた。柵の前では老いた男が1人で黙々と、馬の前の桶に水を張っているところだった。

「その馬は売り物か？」

厩舎の前で足を止めてエレツが尋ねると、男は曲がった腰を慎重に伸ばしながら振り向いた。

「ああ、こいつと……それからそっちの奥にいるやつだけだ」

男の言葉にエレツは示された馬の前に向かう。

手前にいた馬はエレツが正面に來ると、面白くなさそうに頭を垂れて水を張った桶に顔を突っ込む。その様子を見てエレツは小さく息を吐き、世話をしていた男は物珍しげに肩を竦めた。

「珍しいのう、こいつ普段は人懐こいんだが……」

「仕方ない」

エレツは諦めて奥の柵へと向かう。手前にいた馬に比べるといくらか荒っぽいが、エレツと目が合うと途端に大人しく静かになった。エレツが手を伸ばすと、それに応じるかのように馬がエレツの前に顔を差し出す。しかし、近づいてきた馬の耳につけられた赤い印を見つけてエレツは溜め息を吐いた。

「こいつしかいないのか？」

エレツが振り返って尋ねると、男は申し訳なさそうに頷いた。

耳につけられた赤い印は足が遅い馬であることを示す。仮に早馬で5日かかる距離を赤い印のついた馬で走った場合、最低でも6日かかるのだ。しかし、この馬も悪い点ばかりではない。赤い印がついた馬は足は遅いが、多少足場が悪いところでも平気で人を乗せたまま乗り越えることができる。悪路を走る時などは重宝されること

が多い。

「お前にしよう」

エレッツは柵を開けて懐いてきた馬を1頭引き出すと、再び柵を閉めて男を振り返る。

「いくらだ？」

「鞍含めて9金貨でどうだ？」

言いながらエレッツの足元を指差す。エレッツが視線を向けると、壁際に鞍が無造作に置かれていた。うっすらと埃も見えるが作りは悪くない。エレッツは埃を払って馬の背に乗せると、金貨9枚を男に手渡して馬を連れろと厩舎の外に出た。

日はまだ十二分に高い。エレッツは少し考えるように立ち止まってから厩舎を振り返る。

「この街の墓地は移動したのか？ 以前は街中であつたはずだが」旅の目的、それはこの街にも存在する。だが人の多いこの街で、ダズを連れたままその場所を探すわけにはいかなかった。下手をすればダズを巻き込むことになってしまうからだ。そのため墓地に向かうのはダズと別れてから、そう決めてはいたものの街中にそれらしきものは見当たらなかった。

「ああ、あんたこの辺の者かい」

男に問われてエレッツは黙したまま頷く。

「西の方に宿場街があつたのは知ってるかい？」

一瞬迷うが、エレッツはすぐに頷いた。覚えのある街であつたが、同時に苦い記憶も蘇る。

「あの宿場街は無くなったんだ。血飲けつりんの殺戮者があの街の者全員を殺してしまったからのう」

覚えのある呼び名ではあつたが、エレッツは表情1つ変えずに男の言葉に耳を傾ける。

「今ではあの街を墓地にして、この街で死んだ者たちも一緒に埋葬させてもらってる」

凄惨な光景が脳裏に浮かび上がり、馬の手綱を握る手に力がこも

る。

脳裏に蘇るのは鮮烈な赤。重なりあって響いていた悲鳴はやがて消え去り、目の前に広がる骸の数々。どれも、エレッツ自身がかつて犯した罪。

あまりにも多くの人の命をその手にかけて大罪人として、その存在は世界各国で広く知られている。しかし、その大罪人を目の当たりにして生き残ったものはほとんどなく、名前はおろか人相や特徴などはあまり知られてはいない。

「そうか……助かった」

エレッツはそう応えたと慣れたように馬に跨った。手を振る男に軽く頭を下げると、エレッツは街の門をくぐり西を目指す。

馬を走らせるエレッツの脳裏をよぎる光景は、どれも気持ちのいいものではなかった。

命じられるままに剣を振るった日々。

肉を裂く剣から伝わるその感触。

吹き上げる鮮血。

憎悪と恐怖に染まった表情。

平穏だったはずの街は一夜にして死者の街と化していた。

——グレイス　グレイス

私の可愛い人狩り人形

おいで　おいで

食べさせてあげよう

お前が取ってきた人狩りの証

食ベサセテアゲヨウ

心臓ヲ

闇の国 5話

目的の元宿場街へ辿り着いたのは、エレッツが港街を出発してから2日後の夜だった。

街は当時の建物をそのまま残してはいるものの、住人を失ってその大半が荒廃している。通り道や空き地など、建物でない至る所に墓標と思しき木が打ち立てられていた。

エレッツは街の門だった場所に馬を繋ぎ、転がっていた桶に描術の紙1枚を放りこんで水を張るとそれを馬の前に置く。大きな荷袋も馬の傍に置くとエレッツは街中へと視線を向け、腰を折って深く頭を垂れた。

しばらくの間、エレッツは頭を垂れたまま動こうとはしなかった。

馬の水を飲む音だけが辺りに響く。

やがて頭を上げた時には、港街方面の空の色が微かに変わり始めていた。

港街を出てからまだ一睡もしていない。馬に水を飲ませ、草を食べさせる僅かな時間は馬を降りたがそれ以外は走り通しだった。それでもエレッツはそこで休憩することなく、街中へと足を踏み入れた。

本来であれば墓標には死者の名前を刻むものだが、あまりにも突然にあまりにも多くの人の命が奪われたこの街ではできなかったのだろう。比較的新しいものを除いて他に名の刻まれた墓標は見当たらない。

エレッツは名の刻まれていない墓標の前に膝をつき、改めて頭を下げた。先程とは違い、比較的早く頭を上げると別の無名の墓標の前に再び膝をついて頭を下げる。その繰り返しだった。

1人1人の失われた命に頭を下げ、それだけのことをしてきたのだと己に言い聞かせる。1人にかかる時間はさほど長くはなかったが、無名の墓標全てに頭を下げ続けると相当の時間を要した。最後

の墓標に頭を下げ終わる頃には荒廃した街に穏やかな朝日が射し込んで、細く長い影を作り出していた。

エレッツは溜め息を1つ吐くと馬をつないでいる門の方へと歩を進める。数歩進んだところで周囲に風が吹き、まだ新しい墓標の前に置かれているしおれた花が転がった。転がる花を見ていると突然、白く細い指がその花を拾い上げた。

「久しぶりだね」

視線の先で微笑んだのは、エレッツのよく知る顔。皆に望まれて、若くして組織の長となった男。

「あ、ああ……」

微かに青の混ざった短め黒髪は風に揺れ、ダズのそれよりもいくらか明るい藍色の瞳は意志の強さを現すかのように凜としている。世間では義賊として知られる“闇の妖精”という組織の長。エレッツが最後に人を殺した時に所属していた組織だった。

「ああやって、謝っていくつもりなんだ」

若い男は膝をつき、手にした花を元の場所に供えると静かに両手を合わせた。

「……ああ」

「君らしいね、エレッツ」

男は手を合わせるのをやめても、すぐには立ち上がらずに花を戻した墓標をじっと見据えながら微かな笑みを浮かべる。

「ここまでで、何人の人に謝れた？」

「……2万、1653人」

男の意図は分からなかったが、エレッツは素直に答えた。

この街が闇の国では最後に立ち寄るべき街。この国だけで2万人以上の人間を殺めてきたのだと、改めて思い知らされる。

愚かな行為。恥ずべき行為。そして、赦されざる行為。

「報告に来たんだ」

男は立ち上がるとようやく墓標の前を離れ、エレッツに向き直る。

「エーティの腕のこと」

男はもう笑ってはいなかった。射るような視線をエレツに向ける。
「経過は順調。腕の良い医者に巡り会えて本当に良かった。少し支障はあるようだけど、もう普通に生活してる」

男の言葉を聞いて、エレツは小さく息を吐き出す。微かな安堵。組織を抜けてからずっと気にしていたが、やはり背負っていた罪悪感が消える気配を見せなかった。多少気持ちが軽くなった程度。
「仕事は、どうしてるんだ……？」

やっとの思いで尋ねると、男は苦笑して踵を返した。墓標の間をすり抜けて街の外へと続く道をゆっくり歩いて行く。エレツもそれに続いた。

「失ったのは利き腕じゃない方だからね、もう復帰してる」

「……そう、か」

「エーティは君を許したようだけど、僕は君を許せない」

男は振り返らなかった。どんな思いでその言葉を口にしたのか、エレツには想像もつかなかったが苦しんでいるのだけはなんとなく分かった。

「ああ……」

「でも」

男は入り口に着くと、彼が乗ってきたらしい馬の背を撫でる。

「君が悪いやつだとは……、どうしても思えない」

「カイン……」

「戻って来いとは言わない。君がやりたいようにやればいい。君は不器用で、融通がきかなくて、頑固で、世間知らずで、口下手で、でも……一度決めたら絶対に曲げない」

男——カインは軽快な動作で馬に乗ると、ようやくエレツに視線を向けた。

「違うかな？」

「……どうだろうな」

エレツが苦笑すると、つられたようにカインも微かに笑みを浮かべる。

「エレツ、君の旅路に妖精の加護と精霊の導きがありますように」
手綱を握るカインの言葉に、エレツは右手を胸に添えて軽く頭を下げた。形式的なものではあったが、それはエレツの心にしっかりと刻み込まれる。

カインはそんなエレツを見ると、両足で馬の腹を蹴り走り去っていった。その背を見送りながら視線を空へ向けると、太陽はずいぶん高いところまで昇り、影もだいぶ短くなっていた。

カインの姿が完全に見えなくなったところで、ようやくエレツは動きを見せた。馬の足元においてあった荷を拾い上げると、何かの落ちる音が聞こえて視線を向ける。そこには小さめの袋が転がっていた。

「……カインか？」

拾い上げ袋の中を覗き込むと、いくつかの宝石と1枚の紙が入っていた。広げてみると、決して上手いとはいえない字が連なっている。おそらく手紙と呼ばれる類のものなのだろうが、それにしてもあまりにもお粗末なものだった。しかし、それでもエレツにはそれで十分だった。思わず笑みがこぼれるのを感じる。

「字も知らないのに、よく書いたものだ……」

字の読み書きが出来なくても生きてはいける。現に、エレツもつい最近までは字を書くことはおろか、読むことも出来なかった。1人で旅をするにあたってどうしても字の読み書きが必要になり、慌ててダズに教えてもらったのだ。

ダズに教わったときのことを思い返ししながら手紙に視線を落とす。この手紙の主もやはり慌ててカインにでも教えてくれと頼み込んだのだろうか。そんなことを考えながら馬の背に跨ると、この街へ来た時よりはやや緩やかなペースで南方に広がる国境の森を目指した。

エーティだ。

エレッ、元気か？

こっちはみんな元気だ。

腕1本なくても案外平気なもんだな。

いつまでも拗ねてないで、終わったら顔出しに来いよ。

またな

闇の国 6話

馬上のエレッツは鬱陶しそうに舌打ちをすると、帯びていた剣を抜いて正面の枝を叩き落としながら尚も進む。

カインと別れてから、かれこれ10日間は経過していた。2・3日前にここ、水の森に踏み入ってからには豊かな水資源との格闘もあった。水の森とは名の通り、水が豊かな森である。鬱蒼と生い茂る下草や木々はどれも多くの水滴をその身に纏っている。水が多いのに越したことはないが、この森は少々厄介だ。

エレッツの腰に下げた小さな袋と、普段は使わないが旅には必要な荷を詰めた荷袋はどちらも水を弾くように加工された革を使っているので問題ない。しかし、生憎服まではそんな便利な加工がなされていない。水を含んだ服は重く、体に張りついて確実に体温を奪っていた。雨に打たれたようにずぶ濡れになりながら進むものの、やはりこれまでに比べると随分とペースは落ちていた。

「あと10日もあれば次の街へ着くが……そこから南港まで20日は必要か。やはり大分待たせることに——」

そこまで何気なく口にしたところで、突然エレッツの動きが止まる。しかし目の前に現れた枝を叩き落として進路を確保することだけは忘れなかった。

「まずい……」

エレッツは腰に下げた袋の中から透明な珠を取り出して、深い溜め息を吐いた。闇の国の港街を出発してから12日が経過しているが、まだ1度もダズに連絡をしていないのを今になって思い出したのだ。ダズの不機嫌そうな第一声を想像しながら、エレッツは手のひらに転がる珠を見つめながら口を開く。

——伝えよ

普段は決して使うことのない、古の言葉。それに反応するかのように珠は微かに淡い光を放つが、光はすぐに消えて元通りただの透

明な珠へと戻った。その瞬間、

『エレッ！』

頭を殴られたかのような怒声にエレッは思わず顔を歪める。これが周囲に響くような聞こえ方をするものでなくてよかったと、エレッは妙な安堵を覚えた。馬は何事もなかったかのように走り続け、エレッも剣を持つ手は常に前方を意識しながら邪魔な枝葉を叩き落としている。

『10日ぐらいで連絡よこせって言っただろ！ 連絡ないから心配したんだぞ！』

「すまん……」

素直に謝罪すると、ダズはまだ何か言いたそうにしていたが諦めたように大きく息を吐き出した。

『無事ならいいんだけどさ』

「船は出たのか？」

『うん』

剣を振るいながら尋ねると、ダズは普段よりいくらか少し弾んだ声でそれに応じてきた。

『実は出港が1日遅れたんだ。でも、今のところ航海は順調だって。このままだと最短で行けるみたいだ』

「そうか。なら、すまないがしばらく待たせることになるな」

休む間も惜しんで馬を走らせているが、なかなか思うように距離を稼げずにいる。旧知の仲であるダズだけを待たせるならともかく、別の人間もいるとなるとあまり時間はかけずに行きたいのだが思うようにはいっていなかった。

「あと30日はかかるだろうな」

『いいよ、レイとゆっくり待ってるから』

そこまで言うてから、ダズは思い出したように声を上げる。

『エレッ、ゲレリイのアジト付近通るつもりか？』

「最短ルートなら通るな」

目の前に現れた太めの枝を薙ぎ払いながら応えると、ダズは不安

げな声で小さく唸った。

『フィンレイが死んでから、また昔のゲレリイにもどりつつあるらしい。前ほどの勢力はないみたいだけど』

「俺がまだ……グレイスと名乗っていた頃の、か」

『うん。エレツ——グレイスのこと覚えてるやつも多分いるとおもう』

苦々しそうに言うダズの言葉に、エレツも表情を硬くする。

捨てたつもりでいたが、決して捨てることの出来ないかつての名前。親から与えられた名であると同時に、人殺しの名でもあり、血飲の殺戮者と呼ばれる者の名でもあった。

例え捨てられたとしても、生涯忘れることはできないだろう名前だった。

『この前、聞くの忘れてたんだけど……グレイスは最近、出てきてないのか?』

「ああ、大丈夫だ」

不安げなダズの声に苦笑しながら、答える。

「最後に人を殺した日以降、今のところ出てきてない」

『そっか、なら……いいんだけど。お前を止められるヤツはそうそういないからな』

その言葉を聞き前方の枝を切り捨てながら、頭上高くにちらりと視線を向ける。日は随分傾いたようで、木漏れ日もほとんど無くなっていた。

グレイス。

その名前を知る者はほとんどいない。しかし、その者を示す通り名は人々の恐怖の証として世界中に知れ渡っていた。その者の通った街や村は必ずターゲットとなり、老若男女問わず全ての住民がその者の手によって命を奪われる。それが数年前までの約20年間、留まることを知らずに繰り返されていた。

ピタリと止んだのが数年前のことだった。記憶に新しく、皆が忘

れるにはまだそれだけの時間が経過していない。それでも人の命が奪われることはなくなり、誰かがその者を退治したのか、はたまたその者が命を落としたのかと静かに推測ばかりが人々の間に広まっていた。

『それから、船に乗り合わせた客に聞けたんだけど……例の指名手配、1年ぐらい前に取り下げられてたらしいな』

「取り下げ……？」

エレツが訝しげに尋ねると、ダズはやや潜めた声でそれに応じた。『死亡説が流れて何年も現れてないし、もし現れたとしてもその首を狙うやつの方が危ないから取り下げたらしい』

エレツの姿を見て当時のグレイスと結び付けられる者はほとんど存在しない。そのおかげでこれまで顔を晒して歩いていても呼び止められたり、狙われたりするとは殆どなかった。しかし生憎、全くなかったわけではない。どこで知ったのかエレツの顔を知り、攻撃を仕掛けてくる者も少なからずいる。

『でも金貨10万枚の賞金首なんて、異例中の異例だ。一生遊んで暮らしても釣りが出る。手配書が取り下げられたからって諦めるヤツばかりじゃない。まだ、狙うやつはいるだろうから、注意しとけよ』

ダズの言葉にエレツは眉間にしわをよせ、右手に握られた剣を振るう。枝葉に付着した水滴が弾け、支えを失った枝は重力に従って地上に落下した。

仕事の内容にもよるが、平民家庭であれば一般的に1ヶ月金貨4枚から5枚で生活している。それだけあれば多少の娯楽を楽しむつつ暮らすことが可能であるのだ。加えて、ピンからキリまであるとはいえ、賞金首の懸賞金も大体5千枚が限度である。その中の懸賞金金貨10万枚。金に目の眩んだ者が全くないとも限らなかった。

「分かった。ありがとう」

『今度連絡もらうときは南港に着いてるかな。次はちゃんと連絡よこすんだぞ』

そう言うと、ダズはあっさりと会話を終わらせてしまった。エレツの手の中で珠がもう何の音も発しないまま小さく揺れる。

「ゲレリィに……グレイスカ」

袋に珠を押し込みながら握りしめた剣を振るい、伸びてきた枝を弾き飛ばす。自由になった左手は無意識のうちに己の胸元を掴み、握り締めていた。

「……おとなしくしていろ」

誰ともなく言い放った言葉は森の中に静かに消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6917q/>

夢の故郷

2011年2月23日00時40分発行